

Archaeological Laboratory, Co., Ltd.

アルカ通信

ARUKA Newsletter

NO.129
2014.6.1

*考古学研究所(株)アルカは石器と縄文土器・土製品等の実測・整理・分析を強力にバックアップする企業です。

● 神村 透

田舎考古学人回想誌

37

「校区が第三紀層化石の上にある 富草中学校 (S41 42・1966 67)」

下伊那の学校をと希望したら阿南町富草中学校に決まる。木曾からは中央西線で塩尻に 東線に乗り換え辰野 飯田線で南下し天竜峡でまた乗り換え門島で下車 バスで天竜川を渡って台地を上がった所に学校がある。バスの時刻でないと坂道を登っての歩きもあって疲れた。時には温田まで下ってハイヤーでということもあった。私はともあれ家内は一才の娘、翌年は年子の息子が生まれ二人の乳呑児を抱えての木曾との往復は大変でした。学校の一段下にあった教員住宅 授業が終わって帰っていくと家内と子どもの泣き声が時々聞こえたこともあった。

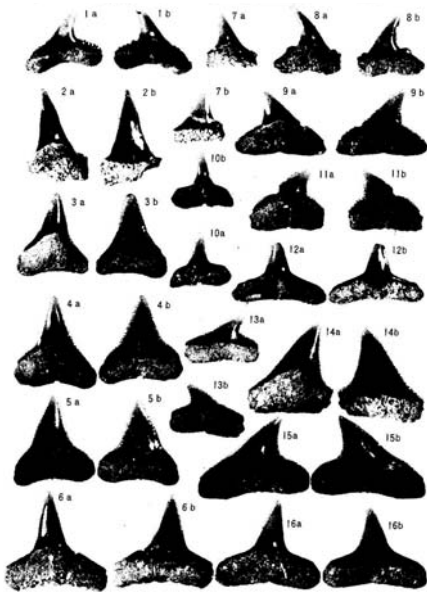
中学校では校区内どこでも化石が採取できるので、職員研究として化石の採集・分類を進めていて、休日には職員全員で化石採集に出かけた。それが楽しかった。空いている教室に化石を並べて分類していた。指導は信州大学の田中邦夫先生が時々見えて化石名を教えてくださいながら分類した。私は高校時代に鹿間時夫先生の指導する地学班にも入っていたので化石採集は考古学ほどではないが楽しみでした。中学生たちも化石を採取して学校に持ってきた。そんな化石の一つに小さな歯であったが、2000万年前のパレオパラドキシアと

いうデスモスチルス目の絶滅哺乳動物の物ということで大騒ぎになった。私にとっては大沢川の土手で箆を当てて崩して採集した小さいサメの歯の思い出が強い。学校は43年に廃校になり採集した化石は阿南町化石館が建てられてそこに展示された。『阿南町の化石』という冊子が作られ、私は「富草地域の土器・石器」を執筆した。

富草時代は2年間でしたが押型文土器『立野式』に夢中になった。木曾日義村で二本木遺跡・稻荷沢遺跡と下伊那以外で立野式を発掘したので纏めてみようと思った。SBC研究助成に『南信地

方に於ける縄文時代早期立野式土器の研究』のテーマで申請し研究補助金をもらった。これを足がかりにして下伊那教育会郷土調査部の発表で『立野式土器研究の問題点』を話し、下伊那考古学会の連絡紙に『押型文土器の問題点』を投稿し、信濃教育会機関誌『信濃教育』に『押型文土器の型式・編年の現状』を発表した。このときの構想は大きかった。『立野式土器の編年の位置について』のテーマで、一 学史に見る押型文土器、二 学史を追った中での押型文土器、三 立野式土器について との三点で纏める予定でした。が、雑誌『信濃』に8回学史を連載するが、途中頓挫したこともあって二・三の分野は未完で終わった。大学時代の研究会で学史の大切さを学んだので、押型文土器に関わる学史は自分なりに多くの文献に目を通した。この文献集めで世話になったのは江坂輝弥さんでした。こういう文献をと便りを出すと必ずコピーして送ってくれた。

私は立野式押型文土器がどの押型文土器よりも古いと主張し続けていた。このことに最初に応じてくれたのが岡田茂弘さんと、奈良県大川遺跡の土器が立野式に共通すると便りをくれた。その後近畿地方を中心に地域独自の押型文土器が発掘され、その古いことが分かり、立野式土器との関連から中部地方での押型文土器の再検討になり、立野式の古さが認められるようになった。私のところに立野式土器を見たいと片岡肇さん・矢野健一さん・谷口康浩さん・和田秀寿さん・宮崎朝雄さん・中島宏さん等が。また土器を持って訪ねてきたのは近藤尚義さん・山田猛さん・松沢修さん・吉田英敏さん・鈴木茂夫さん等が、意見交換にと岡本東三さんも訪ねてきた。押型文土器の指導をと頼まれて飯田市立野遺跡・美女遺跡、望月町新水遺跡、県埋文センターの烏林遺跡・山の神遺跡等を見ている。また私は県外にも関連資料をおって岐阜県・愛知県・静岡県・大阪府等にも遺跡をたずねた。県考古学会早期部会でも表縄文土器から立野式土器について検討学習会を持ってくれた。こうして一つの土器を追ったことで学問的な交流が広がり私は本当に幸せだったと思う。



◀大沢川でのサメの歯

※巻頭連載は隔月です。次回は塚本先生です。

目次

■田舎考古学人回想誌	校区が第三紀層化石の上にある富草中学校 神村 透 …1	■リレーエッセイ	マイ・フェイスレット・サイト(第122回) 菅谷通保 …3
■考古学の履歴書	公務員としての考古学研究者(最終回) 石井則孝 …2	■考古学者の書棚	「アイヌ人物誌 松浦武四郎原著「近世蝦夷人物誌」」内川隆志 …4

考古学の履歴書

公務員としての考古学研究者(最終回)

石井 則孝

1. 私が交流してきた芸術家たち —その2—

美術・音楽好きな私にとって、楽器をもって演奏することは最も苦手であったので音楽はもっぱら劇場での耳の肥やしであった。個人演奏よりも交響楽団が好きで、現在でも年2～3回は演奏会へ出掛けている。芸術作品鑑賞は、時間さえあれば何時何処へでも行くことが可能であるので、学生時代の友人をはじめ、売れない時から応援して超一流の絵描きになったものもいる。

私が現役時代、原稿料とか講演料とか多少の現金が入った時は、気に入ったものを購入したこともあったし、売れない若い作家でも将来性を見込んで無理して作品を買ってあげたこともあった。東京芸大の版画家中林忠良さんとは学生時代からの友人で、『石井さん、時には買ってよ!!』と云われ、無理を承知で3回くらいに分けて買わされたこともあった。鉛筆画家の木下 晋さんとは、山形の注蓮寺の即身佛が私に出合わせてくれたようで、今から20数年前、多摩ニュータウンの発掘現場に現われ、「あなたは何をしていますのですか?」と尋ねられ、「この通り大昔の人が住んだ跡を調査しています。」と応え、「ところであなたは何をやっているのですか?」と尋ねたところ「絵描きです…。鉛筆だけで…。」面白いやつだなあと思っていたら、個展の案内状が届いた。西武線一橋駅前の松本清張の長男の画廊であった。近いので観にいったところ、即身佛をこれでもかといわんばかりに精密に鉛筆で描かれたものを拝見し、すっかり木下さんの虜になってしまった。その頃はまだ安かったので、何点か買わせていただいた。今や大学の先生にもなり、一昨年銀座の永井画廊に招かれ、大展覧会が開催された。その際木下さんのファンも多勢集まり、木下さんとの大論争が忘れられない。もう一人、ペンで○を何万点と描き大画面に仕上げている画家がいる。土井宏之さんである。毎年原宿の喫茶店で個展を行っており、いつもコーヒーをごちそうになって帰ってきたが、ニューヨークでの個展が大評判になり、京橋のパイロットギャラリーで凱旋大展覧会が開催された。土井さんが名コックであることを知る人ぞ知るで今やマネージャーが付き、土井さんが「ファインアート」の大家として一流の画家の仲間入りを果たした。木下・土井のお二人は、人柄というか大変やさしい人物である。日本画家では、創画会のリーダー烏頭尾 精さんとも親しくさせていただいている。超高価なので購入はなかなか出来ないが、20年前くらい裸婦のデッサンを購入させていただいている。

大学の仲間・後輩では、アフガニスタンの男 甲斐大策さん、私とは一時期ミイラ調査の学生であった。井上 靖とミイラを描いたものが大学に残されている。芸術院会員になった藪野 健さんは、人柄が買われずばらしい画家になっている。安藤先生は、学生の才覚を発見する見事な眼力があり、『お前は、オレの授業に出なくてもよい。お前の目ざしているものをやれ!!』と多くの学生を海外へ送っていた。私には、ユーゴへ行く時『バルカン半島の考古学を学んで来い!!』と云われ、横浜の波止場まで送ってくれた。芸術家ではないが、教育大から早大へ来た澤柳先生の弟子星山晋也さんがいる。更生先生の門下生となり、奈文研に入り研鑽をすすめ、後年早稲田へ戻り東洋美術の大家となっている。

私の趣味といえば、昔は切手やコインを集めていたが、今はそれらをどんどん消費している。酒好きの私にとってソバ猪口から始まったものが、今や酒の猪口に変わってしまった。500円から1,000円くらいで買ったものが作家によっては

10,000円以上になったものも多く、もう手が出せない。100箇所くらいあるか?そんな中でも、京焼きの有名作家の作品で飲むとまたひと味違う。

芸術世界の仲間を持つと、学問世界とはまた違った味があり興味がつかない。千葉県立美術館を創設した際、彫刻の藤野天光さんと親しくなり、市川のアトリエへ何回か行ったが、その際、天光さんの師である北村西望師のことを色々教えてくれた。広島平和の像は西望さんではなく藤野さんの作品とっていいのかも知れない。

今育てたいと考えている女性版画家がいる。埼玉在住の時田有理子さん。先日お子さんが生まれ、1～2年は子育てで大変といていたが10年後が期待される作家である。永井画廊で木下さんに引き合わせている。

上記してきたように、ガラクタや焼き物にはじまって、小物が数百点ある。長生きが出来たならば、鷺宮駅前に、小美術館を造りたいと考えている。私が提唱した「鷺宮文化村」構想が一これが実って研究会が発足した。それも区から10万円の補助金をもらって一。

人間の興味・嗜好・欲・力を考えてみると私が考古学の世界へ入ったのは、縄文土器のかたち・文様、それらが早期から晩期にかけて数千年かけて変化していくさまは、日本の縄文土器しかないであろう。私の地球1周4万キロの旅は当分終わりそうにない。最近城と石垣に興味深まり、大航海時代に夢を馳せ、昨年暮ポルトガルの海岸地帯を歩いてきた。健康で過せるならば、当分の間、石の建造物を求めて旅を続けていきたい。

2. 文章を閉じるにあたって

3年間にわたって隔月書かせていただいた拙文も今回が最終章である。私を取り上げてくださった角張淳一さんはもういない。これが痛恨のさびしさである。亡くなったあと、変らず紙面を提供してくださった夫人の角張憲子様に深甚の謝意を表する次第である。研究者にとって文字を記すということは大変楽しいことであり刺激的でもある。これほど自由に好きなように書かせていただいたのは「アルカ通信」しかないであろう。本当にありがとうございました。心から御礼と感謝を申し上げます。

私に八十路近くまで仕事を与えてくださった大学時代の師安藤更生・駒井和愛・滝口 宏・直良信夫の諸先生、文化財保護委員会に勤務してからの上司 榎本杜人・坪井清足の両先生・唐招提寺講堂の発掘調査から、長老の森本孝順師・作家の永井路子先生、人間を大きくさせてくれた東大寺長老上司海雲師・白吉館の皆さん等多くの師・先輩から並々ならぬご指導をいただいた。また、鷺宮駅前に100年前住居を構えてくれた両親、毎日の研学生活を支えてくれた妻・家族へも深い感謝の念を捧げたい。北から南までいる友人諸兄へも。これからもよろしくと申し上げたい。

私が残した良い仕事としては、「全国埋蔵文化財法人連絡協議会」を立ち上げたこと。その

略歴	
1936年	東京鷺宮に生まれる
1964年3月	早稲田大学大学院文学研究科芸術学専攻修士了
同年3月1日	文化財保護委員会記念物課(現文化庁)へ入省
同年5月1日	奈良国立文化財研究所平城宮跡発掘調査部へ異動
1970年4月1日	千葉県教育委員会へ異動
1980年4月1日	東京都教育委員会へ異動
1996年7月15日	東京都埋蔵文化財センター所長で定年退職。公務員生活終了
この間、筑波大学・早稲田大学等9大学の非常勤講師を歴任。昭和女子大学は70歳定年まで22年間勤務	
2001年4月1日	帝京大学文学部専任講師
2007年3月	定年退職

後大阪から開始した「日本列島発掘展」。日本考古学協会札幌大会での解体を叫ぶ学生たちに勝利したこと。若い学徒へ伝えたいことは「発掘が始まったら、かならずその日の日記をつけることと現場写真を撮ること」多摩ニュータウン471-B遺跡の捏造石器は、私が撮影していた土層の写真と精密な実測があったから見分けることが出来た。最後に角張淳一さんと考えを同じくして昨年夏亡くなった京大の山中一郎さんの遺言『関東と東北の石の読めない研究者は職を云々…』

を記して本文の終了とする。頭の中に残るのは、大蔵省へ陳情に行った際、若い主計官から『埋文?金喰い虫さっさと帰れ!!』の返事である。日本の埋文行政は将来どう変わっていくのだろうか。

今回で石井先生の連載は終了いたします。先生、多分野に渡るお話をありがとうございました。隔月連載ですので、131号から岡田淳子先生の連載が始まります。楽しみに！

編集者

レイエッセイ

マイ・フェイバレット・サイト 122

下太田貝塚 ～千葉県茂原市～

菅谷 通保

近所の畑で拾った土器片をきっかけに考古学に興味を持ち、土器や石器を拾い歩いていた私が、最初に経験した発掘調査は小学校5年生の夏休みであった。調査と整理に明け暮れた10代の終わりから40代の始めまで、関わった遺跡は40余りで私の年代ならば決して多いとは言えない。調査開始から報告書刊行まで数年を費やした遺跡がいくつかあり、その最後が千葉県茂原市の下太田貝塚であった。

谷底平野の標高わずか十数mの水田の地下に、縄文時代中期から晩期にかけての3m以上の文化層が1万㎡を超える面積で広がる低湿地遺跡である。昭和の始めに開田工事の際に発見され、昭和12年の先史考古学第1巻第2号の篠崎四郎の報告によって、人骨が出土する多層位遺跡と学会に周知された。昭和41・42年には千葉県立東金高校が学術発掘を行い、50㎡に満たない調査で縄文時代後期の10体の埋葬人骨を検出している。平成9年～11年にかけて河川改修に先立った調査が行われ、集中豪雨・洪水と酷暑に耐えながら私が担当した。

調査範囲は縄文時代の河川の遷移が繰り返され、遺存状態はあまり良くないと考えていた。実際は河道と河道の間に削り残された文化層が遺存していて、後期の密集した埋葬人骨群が検出されて足の踏み場もない状態となり、更に下層から中期の人骨群も検出された。貝層の有無に関わらず人骨・獣骨が遺存したため、時期によって変化する墓域の構成を層位的に把握できる遺跡であった。墓域の形成は遅くとも縄文時代中期後半の加曽利E1式期には始まり、後期中葉の加曽利B1式期まで確認できる。この間、空白を取り巻くように環状に墓を配列する墓域から、方形の範囲を墓で埋めつくす墓域へと構造が大きく変化する。

貝塚であっても遺存が稀な胎児・新生児～乳幼児骨も良く残っていて、加曽利E2式期では素掘りの小さな墓坑の中に遺体を落とし込むように埋葬し、時に掌大の土器片を蓋をするように入れていた。加曽利E3式頃には、再利用が意識的に欠いたものかわからないが、土器の下半分あるいは上半分を埋設した中に埋納する事例が散見されるようになり、称名寺式期

から堀之内1式期にかけては完形の土器を棺とするようになる。

墓坑に横たえて埋葬するのは6歳前後より後に死亡した場合だが、10代前半まででは屈葬の場合に膝を揃えていなかったり、伸展葬の場合には爪先が揃っていないなど、下肢の整え方が緩やかな場合が多かった。

検出層位から加曽利E1式期と判断される人骨4体のうち、3体までは完形土器で頭部を覆った状態で検出された。残る1体は脇に倒した完形の土器が上腕骨を覆った状態であったが、この遺体は頭部を意図的に持ち去られていた。千葉県東京湾岸の貝塚密集地帯では、阿玉台IV式期から加曽利E1式期頃に同様の「甕被葬」が多く見つかっているが、頭部に土器を被せるという行為に遺体の一部を改葬する意識があったことかと想像させられた。

検出した人骨の多くは“遺体”の状態でも墓坑に納めた一次葬であったが、軟組織が腐朽してバラバラの“骨”となったものをとりまとめた二次葬もあり、多くは墓坑を掘削した際に掘りあててしまった骨を片づけたのであろう。墓坑の壁際に骨を寄せてそのまま遺体を埋葬した例や、別に掘った穴にとりまとめて納めた例がある。

別のかたちの二次葬では、腕・足・胴体といった単位での連続性を保った骨格を、一個体としての連続を失った言わば“バラバラ死体”とでも言うべき状態で、数体～数十体分納めた円形の土坑を3基検出した。「多数遺骸集積土坑」と名付けて報告したこの再葬墓の類例は、茨城県取手市中妻貝塚や千葉県市原市祇園原貝塚で知られていたが、私にとってははじめての調査体験だった。この人骨を取り上げる際、イノシシ2体分の牙を加工して紐で繋いだ腕輪とみられる装身具三つが上腕骨に沿うように、残り一つが土坑確認面に近い深さで見つかった。土坑上部で見つかった一片から、“遺骸”が土坑に納められる時には各パーツを繋いでいた紐が腐朽していたことは明らかである。であるならば、残り三片は腕の表面に貼りついた状態で土坑中に納められたということであろう。この観察をきっかけとして、遺骸がミイラ状に変化して皮膚に装身具が貼り付く現象が生じる一次葬と、それを再埋葬した二次葬という一連の墓制を想定し、1970年代から“特殊な合葬例”とされてきた南関東の縄文時代墓制の一端を、自分なりに理解できたと思っている(1)。

報告書(2)を刊行してから、早いもので10年以上が過ぎた。意を尽くせなかった幾つかの課題にその時々での理解で発言してきたが、全体の二割程を失った下太田貝塚が私に突きつける課題は殆ど未解決のまま残されている。数千年の時を経て現代に残った遺跡を、「記録保存」の名目で破壊してしまう者が負う“業”の深さを改めて身に沁みて感じるところであり、自分が調査した他の遺跡が問いかけてくる声を聴く夜も



▲頭部を抜き取られた人骨

多い。一人の人間が生涯に成しうることなどささいなもの
既に知っているが、未熟な私を導いてくれた遺跡に対し、ずっ
と真摯な気持ちを持っていたいと願っている。

(1) 菅谷通保 2007「多遺体埋葬」『縄文時代の考古学 9』同成社
(2) 総南文化財センター 2003『千葉県茂原市下太田貝塚』

※次回のマイ・フェイバレット・サイトは山田しようさんです。

考古学者の書棚

「アイヌ人物誌 松浦武四郎原著「近世蝦夷人物誌」

更科源蔵・吉田豊共訳／農文協・人間原書47(1981)

内川 隆志

「北海道の名付け親」として知られる松浦武四郎(1818-1888)は、文化15(1818)年2月6日、和歌山藩領の伊勢国一志郡須川村(現三重県松阪市小野江)に紀州藩郷士松浦桂介の三男として生まれた。13歳から津藩の儒者である平松楽斎(1792-1852)の私塾で学び16歳で江戸に家出した後、17歳から26歳に至る10年を諸国放浪に費やした。長崎でロシアの南下を耳にして以来、その眼差しは蝦夷地に注がれ、弘化元(1844)年より彼の地を目指し、翌年志を果たしたのである。その後私人として3回、幕府雇いとして3回の蝦夷地調査を敢行し、嘉永3(1850)年の『初航蝦夷日誌』全12冊を皮切りに蝦夷地を紹介する多数の紀行類を出版、名実共に武四郎の名は広く世に知られたのである。中でも安政5(1859)年に刊行された『東西蝦夷山川地理取調図』28巻は、

279名に及ぶアイヌ民族の協力を得て、蝦夷地の内陸までくまなく踏査した地勢図で、後の北海道の国郡名選定に反映されるなどその価値は高く評価されている。明治2(1869)年には政府から正式に蝦夷開拓御用掛、開拓判官の命を受け開拓大主典の要職に就くも、翌明治3(1870)年には利権を手放さない旧体制への不満と開拓使内部の腐敗を理由に職を辞し、

後の人生は明治4(1871)年の大学南校物産会に北海道産の化石や考古遺物を出品するなど少年期より興味を注いできた古物蒐集に没頭し、数多の好古家達との交流をもって蒐集と研究に明け暮れたのである。『撥雲餘興』首巻(明治10年刊行)、『撥雲餘興』2集(明治15年刊行)の2著は、その集大成と言える。ここには近世国学の延長ともいえる黎明期の考古学や文化財の捉え方に関する貴重な情報が盛り込まれている。つまり、松浦武四郎は、同時代を生きた蝸川式胤(1835-1882)や柏木貨一郎(1841-1898)などと共に、町田久成(1838-1897)ら政府の文化財行政を担った要人を支えたキーパーソンなのである。

さて、『近世蝦夷人物誌』は、武四郎が蝦夷地探検家として安政5(1858)年に完成させた著作であるが、松前藩の抵抗によって幕府の公許が得られず、ついに日の目を見なかった和人によるアイヌ民族支配のルポルタージュである。今春、筆者は伊勢の豪商川喜多家歴代コレクションを展示公開する石水博物館で『近世蝦夷人物誌』初編自筆稿本を見学したことを動機として、本書の訳本である『アイヌ人物誌』をここに紹介するものである。

そもそもアイヌ民族の居住地であった蝦夷地は、15世紀に津軽十三湊に拠る安東氏が津軽海峡越えて館を築き彼らの居住圏を脅かして以来、松前の和人豪族蠣崎慶広(1548-1616)による支配、慶長9(1604)年以降の松前藩による圧政が続いたのである。和人支配に対するアイヌ民族の抵抗は、長禄元(1457)年のコシャマインの戦い、寛文8(1669)年のシャクシャインの戦い、寛政元(1789)年のクナシリメナシの戦いなどが知られるものの、不当な搾取と圧政に苦しめられてきたアイヌ民族苦難の状況を伝える具体的な記録は極めて少

ない。本書は、天明5(1785)年の最上徳内(1771-1829)を嚆矢とする幕命による蝦夷地探検家達もほとんど明らかにすることのなかったアイヌ民族の窮状をより具体的に記録したものである。特に武四郎が蝦夷地探査に取りかかった弘化2(1845)年頃は、幕府の直轄領であった蝦夷地が松前藩の復領となり、商人と結託した場所請負制や撫育同化政策など、アイヌ民族への弾圧が激しかった時期であり、武四郎は旅の中でアイヌ民族の優れた知性と温情に触れる一方、その救済を世に訴えようとまとめたものである。内容は、彼らが孝行、貞節、信義、節操の美德に優れた民族であることを裏付ける逸話によって構成されており、武四郎の深い思索に基づくものであることが理解できる。『論語』に云う「木訥は仁に庶し」を地でゆく気高き民族

を世に知らしめ、従順な彼らの心根を利用して利益を貪る和人に対して本来の正しい心を取り戻させようという目論みだったに違いない。

世は移ろい、明治政府は明治32(1899)年「貧困にあえぐアイヌ民族の保護」を名目とし「北海道旧土人保護法」を制定したが、実際にはアイヌ民族の財産を収奪し、文化帝国主義的同化政策を推進するための法的根拠として活用したのである。平成6

(1994)年、菅野茂(1926-2006)がアイヌ民族として初の国会議員となり、「北海道旧土人保護法」の廃止とアイヌ新法の立法化作業が進められ、平成9(1997)年7月1日「アイヌ文化の振興並びにアイヌの伝統等に関する知識の普及及び啓発に関する法律」(法律第52号、アイヌ文化振興法)の施行に伴いようやく同法は廃止(附則2条)され、同時に、旭川市旧土人保護地処分法(1934年(昭和9年)法律第9号)も廃止されたのである。平成9(1997)年には、「アイヌ文化振興法」(アイヌ文化の振興並びにアイヌの伝統等に関する知識の普及及び啓発に関する法律)の制定。平成19(2007)年9月13日には、第61期国際連合総会において「先住民族の権利に関する国際連合宣言」が採択されたことを受けて、平成20(2008)年6月6日衆参議院一致の下に「アイヌ民族を先住民族とすることを求める決議」がなされ、平成21(2009)年には内閣官房に「アイヌ総合政策室」を設置、「アイヌ政策推進会議」開催が決定されたのである。

このように、ここに最近になってようやくアイヌ民族の復権を見るに至った訳であるが、100年前に彼らの優れた英知を見抜き、同胞(「心せよえみしもおなじひとにしてこの国民の数ならぬかは)」として畏敬の念を抱いて接していた心清らかな人物がいたことを忘れてはならない。



「義民レイシャクの話」又五郎によって梁に吊されるオホシタカ

アルカ通信 No.129

発行日 2014年6月1日
企画 角張淳一(故人)
発行所 考古学研究所(株)アルカ
〒384-0801
長野県小諸市甲49-15
TEL 0267-25-0299
aruka@aruka.co.jp
URL : http://www.aruka.co.jp